様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月３１日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)
研究期間：2008～2009
課題番号：２０８０００３６
研究課題名（和文）　高校生の生きる力・ストレス対処能力SOCの形成・発達に関する研究

研究課題名（英文）　The development of sense of coherence in high school students

研究代表者
戸ヶ里　泰典　（TOGARI　TAISUKE）
山口大学　・大学院医学系研究科　・講師
研究者番号：２０５０９５２５

研究成果の概要（和文）：
2008年度、2009年度の、5月、11月、2月に、本調査対象校中央大学附属高等学校の2007年度、2006年度入学生を対象とし、6回の調査を実施した。そこで、2007年に実施したデータと合わせて、1年生の5月から3年生の2月まで計9回にわたり測定されたsense of coherence(SOC)スコア変動および、その変動に及ぼす要因の探索を行った。その結果、中学時代の課題に対する成果、成功経験や、高校生初期の教師との関係、あるいは、教師によって作り出される受容的な環境が、その後のSOCの上昇を大きく左右していること、学校に対する誇りや居場所感とも言えるような学校における所属感覚もまた、大きくSOCの変動を左右していることが明らかとなった。
研究成果の概要（英文）：
Six times research was performed in 2008 and 2009. Research objects were students in Chuo University high school who were 2nd grade and 3rd grade. We made these data combined 2007 data, and examined the change of sense of coherence and the impact of factors on the change. In the result, successful experience in junior high school, the relationship with teachers, accepting atmosphere by teachers and school belonging were effected in the change of student’s sense of coherence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,390,000	417,000	1,807,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,590,000	777,000	3,367,000

研究分野：　総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・応用健康科学
キーワード：健康社会学　ストレス対処能力　高校生

１．研究開始当初の背景

近年、高校生をめぐる社会的環境が大きく変化している。凶悪事件の頻発、不登校、いじめ、自殺といった顕在化した問題のみならず、潜在的な心の病へ対策は、緊急の課題である。こうした要因として、ITの発達に伴うライフスタイルの変化や人間関係の希薄化が言われる一方、1995年度の教育白書以降文

部科学白書では 10 年以上にわたり諸問題の背後にある「生きる力」の強化の必要性を述べている。また、学習指導要領にはゆとり教育の反省に伴う 2003 年および本年 4 月の改定においても依然として「生きる力」が中核として位置付けられている。この「生きる力」は変化の激しい現代社会において、学校で学んだ知識のみで社会生活を営むのではなく生徒一人一人が自ら個性を発揮し、困難な場面に立ち向かう力とされるが、その具体は提示されてはいない。

健康社会学の学問分野における「生きる力」に関連する理論の 1 つとして健康生成論が挙げられる。この健康生成論とは、ストレスの多い状況下にあっても、周囲にあるさまざまな対処資源をうまく活用してそれを成功的に乗り越え、健康あるいは健全な生を維持し、経験を自己の成長の糧にできる能力である「SOC」を中心とした理論のことで、欧米を中心に注目が集まっている。SOC は三つの下位概念、処理可能感、有意味感、把握可能感より成立し、29 項目版および 13 項目版の SOC スケールが開発されている。

SOC の形成・強化については、Antonovsky によって、仮説的に社会文化的歴史的背景や、生育時の子育てパターンや家庭の社会経済的な役割をその源流とする**汎抵抗資源** (General Resistance Resources;GRRs)と呼ばれる、ストレッサーを有効な人生経験に変える「対処資源」を介して 3 種類の経験（一貫性、過少負荷-過大負荷のバランス、結果形成への参加）となり、この経験が SOC の強弱を作るとされている。ただし、SOC が健康状態にどのように影響をするのか、ストレス対処過程でどのような機能を持つかという観点の研究の蓄積は多く、SOC の健康保持・ストレス対処能力概念としての機能・効果は実証されつつある一方で、SOC 自体はどのような要因により形成・強化されるかという実証研究は極めて数少なく、これまでに報告された論文は 20 編に満たない状況である。その中で、幼少期の家庭の社会経済的地位、家庭の経済的環境、家族関係や虐待の有無、心理社会的環境、学業上の成功、学歴、後の職業やキャリアコース、SOC を育む人生経験のうち「結果形成への参加経験」との関連性が示されている。しかしながら今後の臨床的・政策的な示唆を得るための研究蓄積としては不十分としか言えない状況である。

２．研究の目的

そこで、研究代表者らは 2007 年より東京都内 A 高等学校にて、1 年間の縦断研究を始めたが、1 年間という追跡期間では、SOC の大きな変化をみるにはやや短いといえる。SOC の変動・形成要因を経時的に検討した研究は世界的にも類を見ないためさらなる追跡調査を行い、以下の諸点を明らかにすることを目的とした。

第 1 に、SOC スコアの推移・変動の実態、を明らかにすること、第 2 に、高 SOC の変動に対する小学生～中学生時の友人関係及び学校における経験の影響の検討すること、第 3 に SOC の変動に対する、高校生時における友人関係、サポートネットワーク、学校帰属意識、学業成績の変動の影響の検証すること、である。

３．研究の方法

東京都小金井市に所在する私立中央大学附属高等学校の 2006 年入学生を 2008 年 5 月、11 月、2009 年 2 月の計 3 回、および 2007 年入学生を 2008 年 5 月、11 月、2009 年 2 月、5 月 11 月、2010 年 2 月までの計 6 回、自記式質問紙による集合調査を実施した。全生徒 1,539 名を対象とし、2007 年 5 月(第 1 回)、11 月(第 2 回)、2008 年 3 月(第 3 回)の計 3 回、自記式質問紙による集合調査を実施した。

私立中央大学附属高等学校は私立中央大学の附属高等学校で都内の私立高校の中でも難関校といわれる高校の一つである。卒業者の 90%が中央大学に進学している。残りの 10%が他大学に進学し、大学進学率はほぼ 100%である。文部科学省の平成 20 年度学校基本調査報告によれば全国の高等学校生徒の大学等進学率は 52.8%であり、中央大学附属高等学校ははるかに高い進学率となっている。

測定内容は、ストレス対処能力 SOC を測定する、SOC-13 スケール（13 項目 5 件法版）、学校帰属感覚を測定するための学校帰属感尺度（18 項目 5 件法）、学校ウェルビーイング尺度（29 項目 5 件法）、心身症状チェックリスト（7 項目 4 件法）、メンタルヘルスインベントリー（5 項目 5 件法）、そのほか、ライフスタイル、睡眠状況等について測定した。

表1　調査概要と回収数等一覧

	第1回	第2回	第3回
	2007年度入学生		
調査実施日	2008/5/21	2008/12/3	2009/3/10
対象者数(在籍者数)	512	511	510
回収数	502	494	499
完全拒否数	8	3	13
	2006年入学生		
調査実施日	2008/5/30	2008/11/19	2009/2/4
対象者数(在籍者数)	509	509	509
回収数	499	493	457
完全拒否数		6	7
	第4回	第5回	第6回
	2007年度入学生		
調査実施日	2009/5/29	2009/11/18	2010/1/29
対象者数(在籍者数)	503	502	502
回収数	499	455	425
完全拒否数	7	16	22

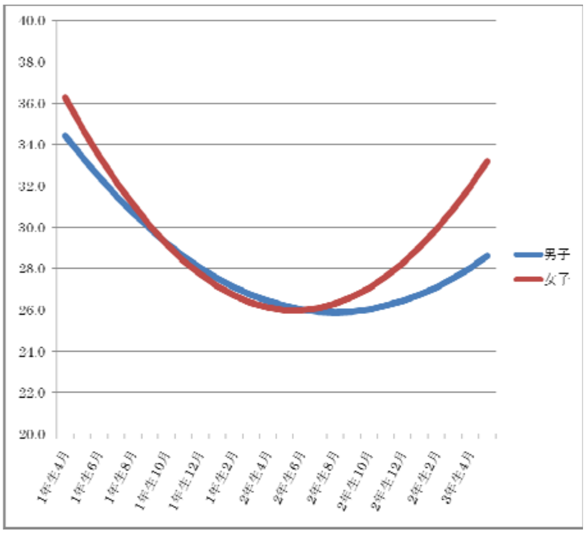

図１　男女別の SOC の変動曲線

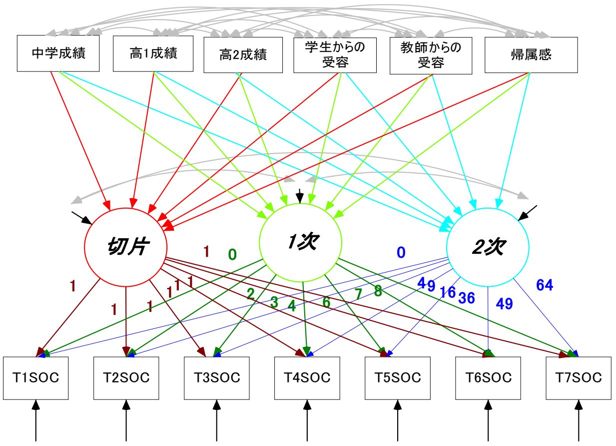

図２　SOC の変動に及ぼす要因に関するパスモデル

表2 SOCの変動に及ぼす要因に関するパスモデルの標準化パス係数の比較

		切片	一次項	二次項
男子	中学3年生時の主観的成績	.26 ***	-.42 **	.35 +
	高校1年生10月の主観的成績		-.19	.26
	高校2年生10月の主観的成績		.23	-.22
	高校1年生2月の生徒からの受容的環境		.11	.00
	高校1年生2月の教師からの受容的環境		.34 *	-.39 *
	高校1年生2月の所属感覚		.33 *	-.37 +
	R2乗値	.07	.55	.50
女子	中学3年生時の主観的成績	.14 +	-.06	.02
	高校1年生10月の主観的成績		.18	-.32 +
	高校2年生10月の主観的成績		-.04	.12
	高校1年生2月の生徒からの受容的環境		-.21	.27
	高校1年生2月の教師からの受容的環境		.22 *	-.29 *
	高校1年生2月の所属感覚		.70 ***	-.87 ***
	R2乗値	.02	.50	.81

分析にあたっては、2007 年から実施している調査データと組み合わせる形で、変動を検討した。統計解析は、SOC の変動については、Latent Growth Curve Model を用いて推定し、関連要因との検討を行った。統計ソフトは Amos16.0 および SPSS16.0 for windows を用いた。

４．研究成果

（1）調査の実施結果

2008 年から 2009 年に行われた、調査の実施概要および調査票回収の実態に関しては、表 1 に示した通りである。

（2）SOC の変動の実態について

SOC の変動を検討したところ、男女ともに二次曲線的な変動であることが明らかとなった。SOC の変動の推定式は、

$SOC(男)=33.4-3.0t+0.3t^2$

$SOC(女)=34.8-4.2t+0.5t^2$

（ただし「ｔ」は入学年 5 月を 0 として 3 か月を 1 単位（0～8）として計算）

であることが推定された（図 1 参照）

図 1 より SOC は入学直後より一度低下が起こり、1 年生の 3 月から 2 年生の 5 月にかけて再度上昇していく、下に凸の曲線である可能性がうかがわれた。

（3）SOC の変動に及ぼす要因の検討

この曲線の切片項、一次項、二次項を従属変数とし、各独立変数（観測変数）を配置したモデルを作成した。学校帰属感覚の 3 尺度に関しては、同時にモデルに組み込むと共線関係の問題が生じるために別にモデルを作成した。その結果、高校 2 年 2 月における学校帰属感覚から各曲線項への関連性はすべて有意にならなかった。また、高校 1 年 2 月の時点の学校帰属感覚の 3 尺度を組みこんだモデルでは表のようなパス係数が得られた。適合度は $\chi2/df=5.0$、CFI=0.84、RMSEA=0.08 であった。このモデル図は、図 2 に示し、モデル内のパス係数は表 2 に示した。

このモデルから明らかになることは、以下の 3 点である。

第一に、高校 1 年の 3 学期の教師からの受容的環境と所属感覚に関しては、男女ともに一次項には正に関連をみせた。これは二次曲線の頂点をより早い時点に引きよせる傾向、すなわち下降傾向から上昇傾向に転じる時点を早める効果が考えられる。

第二に、同じく男女ともに両者は二次項への負の関連をみせた。このことから SOC の急激な上昇的ではなく、より緩やかな変動をもたらす効果があることがわかった

第三に、男子においては中学 3 年生時に成績が良いと評価したものは切片に正の関連、一次項に負の関連、二次項に正の関連を見せた。中学生時の成績が良いと、入学時の SOC は高くなるが、その後の下降傾向から上昇傾向に転じる時期は遅れ、急激な変化をもたらしやすい可能性が考えられた。

以上の結果より、中学時代の課題に対する

成果、成功経験や、高校生初期の教師との関係、あるいは、教師によって作り出される受容的な環境が、その後の SOC の上昇を大きく左右していること、学校に対する誇りや居場所感とも言えるような学校における所属感覚もまた、大きく SOC の変動を左右していることが明らかとなった。
わずか一高校における例ではあるが、こうした縦断的検討結果は、国際的にも例がなく、今後は国際誌に投稿を行っていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 3 件）
①戸ヶ里泰典、山崎喜比古：焦点　看護に SOC をどう活用するのか―SOC スケールとその概要、SOC スケールの種類と内容・使用上の注意点, 看護研究, 42(7): 505-516, 2009.

②戸ヶ里泰典:看護に SOC をどう活用するのか―看護学領域における SOC 研究の動向と課題, 看護研究, 42(7): 491-503, 2009.

③戸ヶ里泰典、小手森麗華、山崎喜比古、佐藤みほ、米倉佑貴、熊田奈緒子、榊原（関）圭子：高校生における sense of coherence の関連要因の検討―小・中・高の学校生活各側面の回顧的評価と SOC の 10 ヵ月間の変化パターンとの関連性, 日本健康教育学会誌, 17, 71-86, 2009.

〔学会発表〕（計 12 件）
①戸ヶ里泰典、小手森麗華、佐藤みほ、米倉佑貴、木村美也子、山崎喜比古. 高校生の健康と生きる力につながる生活探しの調査研究第 4 報～心理社会的学校環境と成功経験が sense of coherence の 2 年間の変化に与える影響,第 56 回日本学校保健学会,那覇, 2009.11.29

②小手森麗華、戸ヶ里泰典、佐藤みほ、米倉佑貴、木村美也子、山崎喜比古.高校生の健康と生きる力につながる生活探しの調査研究第 5 報～生活習慣の自己管理と sense of coherence との関連性の検討,第 56 回日本学校保健学会,那覇, 2009.11.29

③佐藤みほ、戸ヶ里泰典、小手森麗華、米倉佑貴、木村美也子、山崎喜比古.高校生の健康と生きる力につながる生活探しの調査研究第 6 報～永続感の 1 年間の変化と学校帰属感および健康状態との関連性の検討.　第 56 回日本学校保健学会,那覇, 2009.11.29

④米倉佑貴、戸ヶ里泰典、小手森麗華、佐藤みほ、木村美也子、山崎喜比古.高校生の健康と生きる力につながる生活探しの調査研究第 7 報～「生きがい」をもつことと健康状態との関連性の検討,第 56 回日本学校保健学会,那覇,2009.11.29

⑤ 戸ヶ里泰典,小手森麗華, 山崎喜比古, 佐藤みほ, 米倉佑貴, 熊田奈緒子, 榊原圭子.高校生における Sense of Coherence(SOC)の関連要因の検討,小・中・高の学校生活各側面の回顧的評価と SOC の 10 ヵ月間の変化パターンとの関連性,第 18 回日本健康教育学会,東京, 2009.6.21

⑥木村美也子,山崎喜比古, 小手森麗華, 佐藤みほ, 米倉佑貴, 横山由香里, 熊田奈緒子, 戸ヶ里泰典.高校生の母親の地域とのつながりとメンタルヘルス　　第18回日本健康教育学会、東京, 2009.6.21

⑦ 横山由香里, 山崎喜比古, 小手森麗華, 佐藤みほ, 米倉佑貴, 木村美也子, 熊田奈緒子, 戸ヶ里泰典.高校生の学校非公式サイトの利用実態と精神健康,第 18 回日本健康教育学会, 東京, 2009.6.21

⑧ 戸ヶ里泰典, 小手森麗華, 佐藤みほ, 米倉佑貴, 横山由香里, 木村美也子, 熊田奈緒子, 山崎喜比古.高校生の sense of coherence に関する追跡調査(第 1 報)　生徒の SOC スコアの変動とその特徴,第 18 回日本健康教育学会, 東京, 2009.6.21

⑨ 小手森麗華, 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典, 佐藤みほ, 米倉佑貴, 横山由香里, 木村美也子, 熊田奈緒子　高校生の sense of coherence に関する追跡調査(第 2 報)　高校生の SOC・MHI と睡眠時間との関連性の検討, 第 18 回日本健康教育学会, 東京, 2009.6.21

⑩佐藤みほ, 戸ヶ里泰典, 小手森麗華, 山崎喜比古, 米倉佑貴, 熊田奈緒子, 関圭子, 朴敏延　　高校生の健康と生きる力につながる生活探しの調査研究(第 3 報)　乳幼児期の家庭における Family Routines Inventory と高校生のウェルビーイングとの関連性の検討、第 17 回日本健康教育学会、東京, 2008.6.21

⑪戸ヶ里泰典, 小手森麗華, 山崎喜比古, 佐藤みほ, 米倉祐貴, 熊田奈緒子, 関圭子, 朴敏延　　高校生の健康と生きる力につながる生活探しの調査研究(第 2 報)　高校生の SOC の 10 ヵ月間の変化とその関連要因の検討第 17 回日本健康教育学会、東京, 2008.6.21

⑫小手森麗華, 戸ヶ里泰典, 佐藤みほ, 山崎喜比古, 米倉佑貴, 熊田奈緒子, 関圭子, 朴敏延　　高校生の健康と生きる力につながが

る生活探し調査研究(第 1 報)　研究の背景と概要,第 17 回日本健康教育学会、東京, 2008.6.21

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
　戸ヶ里　泰典（TOGARI TAISUKE）
　山口大学・大学院医学系研究科・講師
　研究者番号：20509525

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
山崎　喜比古（YAMAZAKI YOSHIHIKO）
東京大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：10174666

小手森 麗華（OTEMORI REIKA）
中央大学・附属高等学校・養護教諭

佐藤みほ　（SATO MIHO）
東京大学・大学院医学系研究科・博士後期課程

米倉佑貴　（YONEKURA　YUKI）
東京大学・大学院医学系研究科・博士後期課程

横山由香里　(YOKOYAMA　YUKARI)
東京大学・大学院医学系研究科・博士後期課程

木村美也子　(KIMURA　MIYAKO)
東京大学・大学院医学系研究科・研究生